

事業報告

2022年度子ども発達支援室事業報告

1. はじめに

子ども発達支援室の主たる業務は、関係諸機関との連携にもとづく地域支援であり、具体的な取り組みは、メンタルフレンドの派遣事業、特別支援教育ボランティアの派遣事業の2つである。

毎年多くの学生ボランティアが、適応指導教室や小学校の通常クラス・特別支援クラスで活動を行い、支援を必要とする子ども達と関わっている。関係諸機関と連携しながら、ボランティア学生への指導・サポートを継続的に行うことにより、派遣先の子どもたちへのより細やかな支援と学生自身のより深い学びを目指している。

新型コロナウイルス感染症流行のため活動を中止せざるを得なかった2020年度、感染が落ち着いているわずかな期間を見計らい活動を行った2021年度を経て、2022年度は感染増加の波はあったものの中断することなく、久しぶりに継続した活動を行うことができた。

以下に、2022年度の各事業の内容及び課題について報告する。

2. メンタルフレンドの派遣

1996年度から制度化された、不登校等児童に対する本学のメンタルフレンド派遣事業は、2022年度で27年目を迎えた。子ども発達支援室における派遣は、2009年度をもって家庭への個別派遣を終了し、2010年度より地域の適応指導教室等における集団活動への派遣に一本化された。

2022年度の派遣先は引き続き、武豊町適応指導教室、半田市適応指導教室、美浜町適応指導教室の3か所を予定し、連携を行った。武豊町適応指導教室、半田市適応指導教室には、前期から派遣を行ったが、美浜町適応指導教室については、通室する生徒の減少から前期の派遣は見合わせ、生徒の通室が安定し、教室から要請のあった1月から派遣を開始した。

a. 事業内容

最初に事業の方針を確認するため、5月に各適応指導教室の先生方、各市町教育委員会の指導主事の先生方に本学までお越し頂き、2022年度の派遣人数や活動内容等の要望を伺い、昨年同様にコロナ禍での活動についての意見交換を行った。

学生の募集は、4月に学内掲示板や講義、ゼミを通して行った。対象は、美浜キャンパスにある教育・心理学部（子ども発達学部）、社会福祉学部、スポーツ科学部の学生である。5月には、登録を考えている学生向けの事前研修会「ガイダンス&研修会」を行った。事前研修会には、例年各適応指導教室の先生方にも参加をお願いしており、2022年度も教室の雰囲気や活動に求めることについてお話して頂いた。更に、より活動への理解が深まるよう、既に活動をしているボランティア学生たちにも、実際の活動や教室の様子を紹介してもらった。事前研修会に参加できない学生については、研究員が個別に説明を行った。

事前研修会后、ボランティア登録をした学生には、研究員が個人面接を行い、学生それぞれの個性、活動に興味を持った動機を知るとともに、活動可能な曜日・時間について確認をした。更に、YG性格検査を実施し、より学生の個性を理解するよう努め、これらの情報と、派遣先の特徴や要望とのマッチングから派遣先を決定した。今年度は久しぶりの新規募集となり、非常に多くの学生がボランティア登録を行った。

コロナ禍のため2020年からの2年間は新規学生の募集を行うことができず、2021年度は既に活動を行っていた学生のみでの派遣となっていた。2022年度は前年度から活動を継続する学生が少ないことが予想されたため、2021年度末に活動に興味を持った1、2年生を対象にオンライン説明会を開催し、簡単なガイダンスを行った（11名参加）。通常、新規で登録した学生は9月

以降に活動を開始するが、2022年度は前年度に登録した新規学生も前期から派遣し、活動を開始した。

2022年度の登録人数は合計40名であった。派遣状況を表1に示す。派遣した学生は合計9名であり、武豊町適応指導教室には3名（新規3名）、半田市適応指導教室には5名（継続2名、新規3名）、美浜町適応指導教室には1名（新規1名）であった。それぞれの活動回数については表2に示すとおりである。

表1 2022年度メンタルフレンド派遣状況

派遣先	派遣人数(名)
武豊町適応指導教室（武豊町字砂川）	3（男1女2）
半田市適応指導教室（半田市桐ヶ丘）	5（男1女4）
美浜町適応指導教室（美浜町北方）	1（女1）
派遣学生合計	9

学生には、体調管理、手洗い、不織布マスク着用などの基本的な感染症対策を徹底するよう指導を行い、感染が拡大してきた時期にはメール等で注意喚起を行った。また、健康チェック表を作成し、学生に毎日の体温を記録してもらい、派遣先の教室に提出するようにした。

活動は基本的に毎週、もしくは隔週のペースで、同じ曜日・時間帯に行った。活動を開始した学生には、活動日ごとの報告書の作成、更に定期的な（活動頻度にもよるが月に一回程度の）個別のスーパービジョン（SV）受けることを義務付けた。SVでは、報告書をもとに活動を振り返り、学生が感じる疑問や不安、気づきについて話し合い指導を行った。また、昨年同様に、オンラインでもSVを受けられるようにし、感染状況や学生の希望により、対面かオンラインかの選択ができるよう配慮をした。

2月には、2年ぶりとなる対面での「活動報告会」を開催し（6名参加）、活動する学生同士の体験からの学び合いを目指した意見交換を行った。感染症拡大防止の

ため、今年度は登録のみで活動を行っていない学生には参加を呼びかけず、実際に活動している学生のみ参加に限定した。登録のみの学生には希望があった場合のみ活動報告会の内容を個別で説明することを伝えたが、希望する学生はいなかった。また、活動を終え卒業していく4年生には「活動のまとめ」を作成してもらった。

派遣先との連携を図るため、必要に応じ電話連絡を行い、12月から1月には、教員および研究員が各適応指導教室へ訪問し、現場の先生方から、教室内の子どもたちの状況や学生の活動の様子をお聞きする機会を設けた。

b. 振り返りと今後の課題

2022年度は、2年ぶりに新規ボランティア学生を募集したため、非常に多くの学生がこの活動に興味を持ち、登録を行った。コロナ禍でボランティア活動をはじめとした課外活動が制限され、学ぶ機会が得られなかった焦りを感じている学生も多かったようである。しかし、派遣先が3か所のみと限られており、多くの学生の希望に沿えない結果となった。また、以前は活動のチャンスが得られなかった学生にも、活動報告会の参加を呼び掛け、学びの機会を提供していた。しかし、2022年度は感染拡大防止のため、活動者のみの参加に限定し、そのような機会を提供することができなかった。コロナ禍でも「学びたい」という学生の熱意にどのように応えていくかは今後の課題である。

メンタルフレンドの活動については、派遣先の先生方からおおむね肯定的な評価を頂いた。通室する生徒たちと年齢が近く、興味や関心事を通じてコミュニケーションを取りやすいこと、また少し先を進む先輩モデルとして、子どもたちの視野を広げるきっかけになれることを、特に有意義な存在と捉えて頂いているようである。先生方には、学生の活動はもとより、それぞれの性格、生活や進路のことまで、大変温かく見守って頂いた。活

表2 2022年度メンタルフレンド活動回数

派遣先	活動回数(のべ)												合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
武豊	0	0	3	1	0	9	12	10	6	6	2	2	51
半田	0	2	7	3	0	3	12	13	9	4	5	1	59
美浜	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	2	4	7
合計	0	2	10	4	0	12	24	23	15	11	9	7	117

動開始当初は自信がなく委縮しがちな学生が、徐々に自分らしい活動ができるようになるのは、肯定的で安心感のある場を与えられていることが何より大きい。

昨年度は感染拡大によって、通室する生徒たちとの関係を築く途中で突然の活動中止となり、安定した関係性の構築が難しかった。今年度は活動中止することなく通年の派遣を行うことができ、学生は継続的な支援を学ぶことができた。継続的な活動の中で、学生自身も子ども達や教室への愛着が強まり、やりがいや手ごたえをより感じる事ができたようである。また、通室する子どもたちと同様に、学生自身もメンタルフレンドとして教室で受け入れられ、居場所を見出す過程を体験し、通室する生徒の気持ちを自らの体験を通して考える機会となった。前向きになれなかった子が、少しずつ前を向き、成長していく姿を見守ることができたと報告した学生もあり、継続的に活動することの意義を再確認した。

「活動報告会」では、学生それぞれがメンタルフレンドとしての体験を振り返り、自らの言葉で表現し、共有した。それぞれの適応指導教室の活動内容や雰囲気の違いを共有するとともに、通室する生徒たちとのコミュニケーションをどう広げていくか、様子が気になる生徒にどのように声をかけ、関わるかについて、自らの考えや実践を踏まえた活発な意見交換が行われた。また、自らの体験を重ね合わせながら、教室の存在意義について感じたことを報告した学生もいた。同じ適応指導教室を担当している学生同士でも、子どもへの理解や関わり方の工夫は様々であり、お互いの考えを共有することで、新たな気づきが生まれる。普段は個人的なSVのみで、通室する子どもたちについての情報や、活動で感じる悩みを共有する機会が持てないため、大変貴重な機会となった。今回は特に対面で行なったため、より自由な意見交換ができたようである。活動者全員が集まることのできる時間を設定するのは難しいが、貴重な学びのチャンスであり、今後も各教室の活動者ごとに集まる方法など、工夫をしながら企画していきたい。

今年度、美浜町適応指導教室については、通室する生徒の減少から前期の派遣は見合わせ、派遣予定の学生には待機してもらい、教室から要請があればすぐに派遣できるように準備した。感染症対策やオンラインの活用など「コロナ禍での活動」が定着してきたが、今後も状況の変化や教室からの要望に合わせて柔軟に対応できるよう、心掛けていきたい。

今後は「コロナ禍での活動」が日常のものとなっていくと思われる。引き続き感染症への対策はしっかりと行いながら、状況の変化に柔軟に対応できるよう心掛け、教室へ通う子どもたちの間接的支援と、学生の成長の両方を視野に、研究員として学生へのサポートをしていきたい。

3. 特別支援教育ボランティアの派遣

本事業では、何らかの配慮やサポートが必要な子ども達のいるクラスへ、学生ボランティア、いわゆる特別支援「学生」支援員を派遣している。2008年度から半田市教育委員会との協議の上試行され、2009年度より正式に開始されたものであり、2022年度で14年目を迎えた。2022年度の派遣先は、前年度から引き続き依頼のあった、亀崎小学校、雁宿小学校、宮池小学校、半田小学校の4校であった。これまでに半田市内の他の小学校から派遣の要望はあるが、特に学生の交通手段の理由から4校への派遣となっている。

a. 事業内容

最初に派遣先との事業方針を確認するため、4月には、半田市役所に教員、研究員で訪問し、教育委員会指導主事、各小学校の担当の先生方と打合せを行った。前年度の振り返りを行い、各小学校の活動に対する要望を伺うと共に、本事業の目的、また配慮をお願いしたい点について改めて説明を行った。特にコロナ禍における教育委員会や学校の方針について、昨年度から行ってきた感染症対策を振り返り、意見を伺った。

学生への募集は、メンタルフレンドと同様、4月に学内の掲示板や講義、ゼミを通じて行い、5月には活動への理解を深めてもらえるよう「ガイダンス&研修会」を開催した。対象は、美浜キャンパスにある教育・心理学部（子ども発達学部）、社会福祉学部、スポーツ科学部の学生である。研究員からの説明に加え、より活動への理解が深まるよう、既に活動をしているボランティア学生にも、実際の活動や教室の様子を紹介してもらった。事前研修会に参加できない学生には、研究員が個別に説明を行った。

登録した学生には、研究員がまず個人面接を行い、学生それぞれの個性を知るとともに、将来目指したい職業や領域なども聞くよう努めた。また活動可能な曜日・時間、希望する活動形態などを確認し、派遣先の特徴や要

望とのマッチングを行い、配置を決定した。

前年度から活動を継続する学生は、派遣先との打ち合わせを終えた5月から活動を開始し、2022年度から新たに活動を開始する学生は、派遣の配置が決まり、事前挨拶などの準備を終えた9月以降に活動を開始した。メンタルフレンドと同様に、特別支援教育ボランティアも前年度から活動を継続する学生が少なかったため、活動に興味を持ち、前年度末の説明会を経てボランティア登録をした新規学生も前期から派遣し、活動を開始した。2022年度に活動を行った学生は、亀崎小3名、雁宿小6名、半田小4名、宮池小4名の、計17名であり(表3)、活動回数は、表4に示した。

表3 2022年度特別支援教育ボランティア派遣状況

派遣先	派遣人数(名)
亀崎小学校	3(女3)
雁宿小学校	6(男1女5)
半田小学校	4(女4)
宮池小学校	4(女4)
派遣学生合計	17

コロナ禍での活動であり、学生には引き続き体調管理、手洗い、不織布マスクの着用、検温などの基本的な感染症対策を徹底するよう指導を行い、感染が拡大してきた時期にはメール等で注意喚起を行った。また、健康チェック表を作成し、学生に毎日の体温を記録してもらい、派遣先の学校に提出するようにした。

活動は基本的に毎週、もしくは隔週のペースで、同じ曜日・時間帯に活動を行った。活動を開始した学生には、活動日ごとの報告書の作成、更に定期的な(活動頻度にもよるが月に一回程度の)個別のスーパービジョン(SV)受けることを義務付けた。SVでは、報告書をもとに活動を振り返り、学生が感じる疑問や不安、気づき

について話し合い指導を行った。また、オンラインでもSVを受けられるようにし、感染状況や学生の希望により、対面かオンラインの選択ができるように配慮した。

特別支援教育ボランティアでも、2月に対面での「活動報告会」を行った(11名参加)。ひとりずつが活動を振り返り、意見交換を行うことで、学び合いができる場とした。久しぶりの対面での報告会となったが、感染拡大防止のため、登録のみの学生には参加を呼びかけず、実際に活動している学生のみ参加とした。登録のみの学生には希望があった場合のみ活動報告会の内容を個別で説明することを伝えたが、希望する学生はいなかった。また、活動を終え卒業していく4年生には「活動のまとめ」を作成してもらった。

活動が始まってからの派遣先との連携は、折に触れ電話連絡を行い、12月から1月には研究員が各小学校へ訪問し、現場の先生方から学生の活動の様子、支援対象となる子どもの様子を伺い、問題点や改善点についての話し合いを行った。

b. 振り返りと今後の課題

特別支援教育ボランティアを行う学生は、教員やスクールカウンセラー、スクールソーシャルワーカーなど、学校に関わる職業を志望している者が多く、学校現場で学びたい意欲が強いため、数年にわたって活動を継続する学生が非常に多い。今年度はコロナ禍で活動に興味を持ちながらも機会が得られなかった4年生も「卒業までに少しでも学ぶ機会を得たい」と応募し、そのような学生は優先的に派遣するようにした。

今年度も各小学校からは学生の活動に対し、概ね肯定的な評価を頂いた。小学校の先生方には、学生の熱意を温かく見守って頂き、現場の先生方のご指導の仕方を見せていただくことで、多くの学びの機会を頂いた。通常の学校生活だけでなく、運動会や学校独自の行事などに

表4 2022年度特別支援教育ボランティア活動回数

派遣先	活動回数(のべ)												合計
	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月	1月	2月	3月	
亀崎	0	0	2	2	0	4	2	2	0	0	1	2	15
雁宿	0	0	9	4	0	11	16	16	11	4	6	2	79
半田	0	0	3	3	0	7	11	10	9	3	5	5	56
宮池	0	0	3	2	0	5	6	7	6	2	8	8	47
合計	0	0	17	11	0	27	35	35	26	9	20	17	197

もお声がけ頂き、様々な場面での子どもたちとの関わりを体験させて頂いた。また、どの学校からも、できるだけ多くの学生を派遣してほしいという要望を頂き、学生たちの熱心な活動を評価して頂けたと感じている。

小学校での配置は特別支援クラスが多く、支援や配慮が必要な子どもたちとの関わりが活動の中心となる。時として自分の行動がコントロールできなくなる子どもたちに、どのように関わり、サポートするかを学ぶが、特に活動を始めたばかりの学生は、うまく関われずに落ち込み、自信をなくすことが多い。そのような学生に、SVでは焦らず継続的に関わることを目標に、目の前の子どもがどんな個性を持っているのか、何に困っているのかを共に考えながら、効果的な方法を探すようサポートした。

また、継続的に関わることで、子どもたちとの関係性の深まり、それ故に新たに生じてきた悩みを報告する学生もいた。子どもたちとの信頼関係ができると、距離感が近くなり、良い面もあるが、難しさも出てくる。子どもたちの行動や接触をどこまで許容し、どこから線引きをするかについては、SVでも対応を共に摸索した。学生自身も悩み、試行錯誤しながら活動を続け、SVでは研究員と共に活動を振り返るといった繰り返しの中、それぞれが自分なりの関わり方を見出していった。

今年度の「活動報告会」は、実際に活動している学生のみでの参加であったが、多くの学生が参加し、自らの体験を振り返り、共有した。特に活動を始めたばかりの学生は、先輩の学生が同じように悩んできた体験を聞くことが安心感につながっている。また、今年度はどの小学校でも活動を継続的に行うことができたためか、「毎週活動すると、今週気付いたことを次週に生かせる」と継続的な活動の意義を再確認できたという意見が多かった。一方で、先に述べた「子どもとの距離感の難しさ」について言及する学生もいた。子どもたちと仲良くなるにつれ、線引きが難しくなり、「先生ではない、でも子どもと同じ立場でもない」ボランティアの立場として、どう対応するべきか模索し、「ボランティアは子どもと先生との中間の立ち位置」「授業の時とそれ以外の時で、立ち位置を変える」とそれぞれが自分なりの「ボランティアとしての在り方」を見つけていったようである。また、子どもとの身体的な接触についても取り上げられ、「自分が嫌かどうかを考える」「迷った時は先生に相談する」等の意見が出された。身体的な接触について

は、学生により問題意識や感じ方が異なる。しかし、報告会で取り上げられたことで、自分の中になかった視点に気付き、考えるきっかけにもなった。学校の先生方との関係において「先生の期待に全て応えなければいけないわけではない」「その時の子ども次第のことも多い」ことに気付き、自信をもって活動ができるようになったと報告した学生もいた。教員志望の学生は教育実習を経験し、教育実習での在り方とボランティアとしての在り方の違いをより明確に感じたようである。

例年活動を中断する学生はいるが、今年度も経済的事情や家庭の事情などで活動を中断せざるを得なかった学生が数名いた。以前から交通費の負担の大きさは問題に上がっていたが、コロナ禍でより切実な問題となってきたと感じる。交通費に関して各小学校との打ち合わせの場でも課題として取り上げてきたが、交通費支給は難しい状況である。現時点では、学生の状況に応じて活動の回数を減らす、あるいはしばらく活動を休止する等の方法も提案し、なるべく活動を続けられるようサポートしているが、学校現場での学生ボランティアへの期待が大きくなる中、引き続き課題として考えていきたい。

今後も学生が学校現場での貴重な体験を前向きに生かしていけるよう、活動をフォローしつつ、子どもたちや学校への間接的な支援を行っていきたい。学校の先生方には、お忙しい中、活動時間や頻度について学生が活動しやすいようにご配慮いただいている。各小学校の先生方にあらためて感謝しつつ、今後も誠意ある指導を心がけたい。

< 2022年度 子ども発達支援室構成員 >

子ども発達支援室長	瀬地山葉矢（教育・心理学部／子ども発達学部）
運営委員	堀 美和子（教育・心理学部／子ども発達学部） 山崎康一郎（社会福祉学部）
研究員	新美 都子 伊藤奈津子